

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：82674

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23650452

研究課題名（和文） 世代間交流事業におけるダークサイドの分析と予防策の研究

研究課題名（英文） Research on the dark-side of intergenerational programs and the preventive measures

研究代表者

藤原 佳典 (Fujiwara Yoshinori)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）

・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長

研究者番号：50332367

研究成果の概要（和文）：

新聞記事の内容分析から世代間交流事業に対する社会的な関心の変遷を把握したうえで、世代間交流事業主催者に対する質問紙調査から世代間交流事業の現状と課題について明らかにすることを試みた。その結果、世代間交流事業に対する社会的関心の高まりが認められる一方で、これまでの交流事業は単発で不定期的なものが多く世代間事業の課題を抱えていることが示された。この結果をもとに、23 項目から成る世代間交流事業チェックリストを開発した。

研究成果の概要（英文）：

The objectives of this study were (1) to clarify the changes of social concern on intergenerational programs, and (2) to determine the current state and the issue with intergenerational programs. The results show that social concern on the intergenerational programs has increased. However, most intergenerational programs were infrequent and quite time intensive. Furthermore, several issues mentioned must be addressed in order to create programs that have wide-ranging benefits in each community. Finally, we invented the check-list for the intergenerational program with specialists of intergenerational programs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：総合領域

・科研費の分科：生活科学・細目：生活科学一般

キーワード：世代間交流、失敗事例、内容分析、チェックリスト、ダークサイド、世代間交流事業

1. 研究開始当初の背景

わが国における世代間交流事業に関する調査では、世代間交流事業を実施する学校や自治体が増加している一方で、継続的な事業に発展していない様子が報告されている。こうしたことから、今日の世代間交流事業に対する社会的な関心の高まりと世代間交流事業の現状には、大きな隔たりがあることが想定される。こうした隔たりは、今後の世代間交流事業の進展を阻む要因になりうる可能性を含んでいる。

2. 研究の目的

社会意識を探るための有効な方法とされる新聞記事の内容分析により世代間交流事業に対する社会的な関心の変化を把握する。その上で、新聞記事で掲載された世代間交流事業の主催者を対象に質問紙調査を行い、世代間交流事業の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

全国紙3紙(朝日新聞、読売新聞、毎日新聞)のオンライン検索サービス(それぞれ「聞蔵Ⅱビジュアル」、「ヨミダス歴史館」、「毎索」)を用い「世代間交流」「世代間交流事業」「世代間交流プログラム」をキーワードとして記事を検索した。データ採録時期は、2011年3月から4月であった、抽出した新聞記事について、世代間交流事業に関する記事を選択した(予告、広告、選挙公約などの本分析に不適切な記事は除いた)。期間は、世代間交流に関する記事が初出した1988年から2011年12月までである。

次いで、2009年8月から2011年8月までに新聞に記載されかつ事業主催者への連絡先が判明した65事例に対して電話にてアンケート調査の依頼を行い、最終的に本調査への協力に応じた56事例を調査対象に郵送調査を実施した。調査対象団体には、質問紙調査に記入した後、同封した返信用封筒で、研究者宛に直接郵送してもらった。回収期間は、2011年10月1日から11月5日とした。

4. 研究成果

世代間交流事業に関する記事数の変遷について見ると、1990年代の終わり頃から増加し始め、2002年をピークに一時減少傾向が見られた。年代ごとに世代間交流事業に関する新聞記事のタイトルの変遷をみると、社会政策の変化に応じて、90年代末から今日まで世代間交流事業の記事が増加している傾向が示された(図1)。

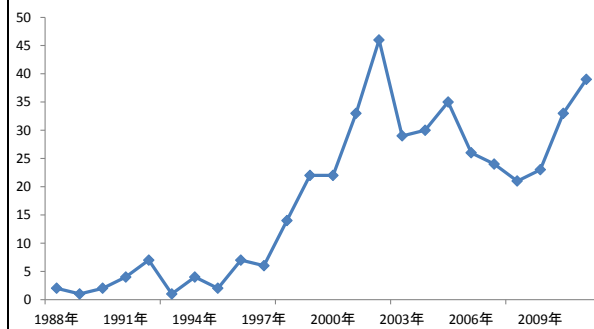


図1. 「世代間交流」に関する記事数の推移

世代間交流事業の主催者を対象にした質問紙調査からは、高齢者と児童を対象にしたものだけではなく、全世代や三世代等を対象にした多世代参加型の交流事業も多く見受けられた。交流内容について見ると、ゲーム、歌・踊り、昔遊びなど多種多様な交流内容が行われていることが示された。

ただし、ほとんどの世代間交流事業は継続期間が短く、活動頻度も年に数回程度であることが示された。世代間交流事業の課題について見ると、ほとんどの事業は何らかの課題を抱えており、具体的に①世代間ギャップの問題、②運営の問題、③交流プログラムの問題、④参加者確保の問題、といった課題が示された(表2)。

①世代間ギャップの問題については、子どもの接し方が分からない高齢者や高齢者との対応にとまどう子どもといった世代間のギャップや、高齢者施設と学校との連絡がうまくいかずに事業が進展しないといった記述が示された。

②運営の問題では、世代間交流事業を実施するにあたり、学校や児童館では高齢者のためのバリアフリーが不十分であることや、スタッフのスキル不足や人手が不足していることなどの記述が特徴的に示された。

③交流プログラムの問題については、特殊な交流内容であったり、強制的に世代間交流を強いるような内容であったりした場合に、子どもや高齢者があまり関心を示さず世代間交流がうまくいかないといった記述が認められた。

④参加者確保の問題では、世代間交流事業のPR不足や老人クラブや学校とのつながりがなく、参加者の高齢化が進み、参加者を集めるのが難しいといった記述が示された。

表 2. 世代間交流事業の課題

世代間交流の課題	件数	(%)
高齢者の参加者不足	15	(28.8)
子どもの参加者不足	14	(26.9)
スタッフの人手不足	11	(21.2)
日程調整	9	(17.3)
子どもの態度	9	(17.3)
参加者の安全確保	9	(17.3)
交流内容	9	(17.3)
高齢化	6	(11.5)
スタッフの対応能力	6	(11.5)
施設環境	6	(11.5)
高齢者の態度	6	(11.5)
他施設、学校との連携	6	(11.5)
資金の確保	3	(5.8)

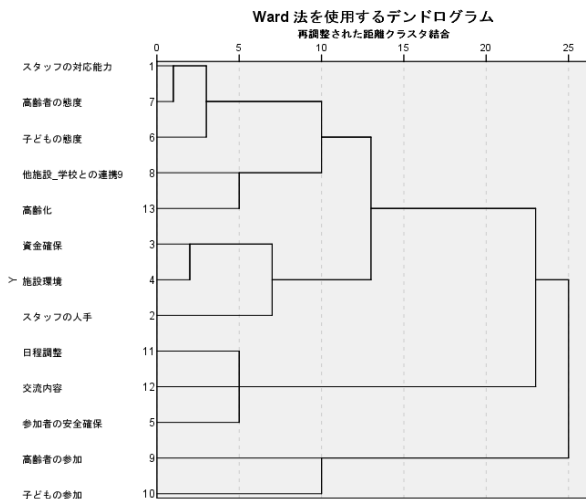


図 2. 階層的クラスタ分析(Ward法)

以上をまとめると、世代間交流事業に対する社会的関心の高まりが認められる一方で、これまでの交流事業は単発で不定期的なものが多く世代間事業の課題を抱えていることが示された。これらの課題について、世代間交流事業の継続的な展開を目指すには、高齢者と子どもの両世代をつなぐための「交流プログラム」および「適切な参加者数」を提案する仲介者・集団(コーディネーター)の役割が重要になることが提言された。

本調査の結果をもとに平成 24 年度には、世代間交流事業に詳しい研究者や実践家とともに 23 項目から成るチェックリスト案を作成した。チェックリスト案については、23 年度の調査対象事例に郵送配布して使用してもらい、その妥当性について検証した。最終

的に 59 事例から回答があり、項目分析および因子分析によりチェックリストとしての妥当性が示された(表 3)。

表 3. 世代間交流事業チェックリスト

質問内容	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまりそう思う	いそ思う
(1) 事業の計画段階で、いろいろな人に意見を求めた。	1	2	3	4	5
(2) 事業の目的は、明確になっていた。	1	2	3	4	5
(3) 十分に広報がされていた。	1	2	3	4	5
(4) 事業の参加者数は、この内容に適した人数だった。	1	2	3	4	5
(5) 事業が開催された場所は、活動に適した広さだった。	1	2	3	4	5
(6) 参加者が開催場所へアクセスしやすいように工夫していた。(駐輪場・駐車場の確保、案内板の設置など)	1	2	3	4	5
(7) 事業のスタッフは、「高齢者」と「子ども」について、十分理解していた。	1	2	3	4	5
(8) スタッフ間の連絡は、スムーズにいかなかった。	1	2	3	4	5
(9) 子どもと高齢者の参加者は、それぞれが事業の内容に関心を持って取り組んでいた。	1	2	3	4	5
(10) 同じ世代同士が固まらないような工夫をした。	1	2	3	4	5
(11) 事業が開催された場所は、子どもが安全に活動できるような配慮がされていた。	1	2	3	4	5
(12) 事業では、子どもが高齢者に感謝する様子が見られた。	1	2	3	4	5
(13) 子どもの参加者に親しみを感じた。	1	2	3	4	5
(14) 子どもの参加者の態度に、イライラすることがあった。	1	2	3	4	5
(15) 事業が開催された場所は、高齢者が安全に活動できるような配慮がされていた。	1	2	3	4	5
(16) 高齢者の参加者に親しみを感じた。	1	2	3	4	5
(17) 高齢者の参加者の態度に、イライラすることがあった。	1	2	3	4	5
(18) 事業の中で、高齢者と子どもが自然に話をすることが見られた。	1	2	3	4	5
(19) 事業が終わった後に、スタッフ間で反省点を確認した。	1	2	3	4	5
(20) 事業が終わった後で、達成感を感じた。	1	2	3	4	5
(21) 次の事業の実施を計画している。	1	2	3	4	5

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

(1) 村山陽、竹内瑠美、大場宏美ほか、世代間交流事業に対する社会的関心とその現状：新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問紙調査から、日本公衆衛生雑誌、査読有、60 巻、2013、138-145

(2) 藤原佳典、世代間交流における実践的研究の現状と課題、日本世代間交流学会誌、査読有、2 巻、2012、3-8

〔学会発表〕(計 3 件)

① 藤原佳典、村山陽ほか、世代間交流によるコミュニティ再生を考える会Ⅲ、第 71 回日本公衆衛生学会総会自由集会、2012. 10. 25

② 村山陽、安永正史、竹内瑠美ほか、世代間交流の長期的効果の検討、日本世代間交流学会第 3 回全国大会、2012. 10. 06

③ 藤原佳典、村山陽ほか、世代間交流によるコミュニティ再生を考える会Ⅱ、第 70 回日本公衆衛生学会総会自由集会、2011. 10. 19

〔図書〕（計1件）

(1) 藤原佳典, 他、ミネルヴァ書房、ソーシャルキャピタルで解く社会的孤立、2013、289

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤原 佳典 (Fujiwara Yoshinori)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長

研究者番号：

50332367

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

村山 陽 (Murayama Yoh)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・非常勤研究員